慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	吉田松陰の世界認識
Sub Title	
Author	中村, 勝範(Nakamura, Katsunori)
Publisher	慶應義塾大学法学部
Publication year	2008
Jtitle	慶應の政治学 日本政治 : 慶應義塾創立一五〇年記念法学部論文集 (2008.) ,p.239- 266
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Book
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=BA88453477-00000008-0239

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

吉田松陰の世界認識

中村勝範

一　序
二　遊学以前の松陰の国際認識
三　衝撃と反応
四　結　語

一　序

吉田松陰[1]は徳川時代末期における戦闘的尊皇攘夷論者であった。天保元（一八三〇）年に長門国萩城下松本村に生を享け、安政六（一八五九）年に江戸伝馬町獄舎において刑死した。

松陰は修学のため嘉永三（一八五〇）年八月二十五日に古里を出発し、長崎・平戸へ向った。同年十二月大晦日に帰藩した。二十一歳[2]の時である。

松陰は鈐韜の家を継ぎ、山鹿流兵法家師範として長州藩主毛利敬親に仕えていた。家禄は五十七石六斗であった。藩府に提出した遊学請願書[3]は「軍学稽古」のため肥前平戸松浦壱岐守家臣にして山鹿流兵法家葉山佐内に従学し修練したい旨申し出て、認可されていた。

松陰は葉山佐内へも従学志願の私信を認めていた。従学の目的を二点挙げていた[4]。

第一点は軍学稽古である。山鹿流兵法のさらなる修練である。藩府への申請と同じである。

第二点は「虜の情状」を審にし、「折衝禦侮の大計」を究めることとした。「虜」とはアジアを制覇し、日本に迫る西洋諸国である。とりわけ阿片戦争で清国を打ち破ったイギリスに重点が置かれた。平戸は「黠虜覬覦」する「賊衝」である、その地において敵の情況並びに敵からの防衛を研究すること久しい葉山から日本の安全保障問題を修学したい、とあった。

松陰の西遊目的は明確であったが、その西遊目的を成就したか否かにつき本格的な研究をした論稿を寡聞にして知らない。もっとも松陰に関する少なくない著述を残している奈良本辰也は、松陰は「十九歳で長崎へ行」き「変った」、従来の自分の学問は「机上のものでしかなかった」ことを「反省」し、オランダの文明を吹き込まれたり、阿片戦争に関する多くの記録を読み「動揺」した、と述べてはいるが[5]、何がどう変ったのか、何を反省し

たのか、何に動揺したのか等につき一言半句も論じていない。松陰は平戸・長崎修学中、これまで学んできたことが机上の空論であったとか、反省したとか、動揺したとかいう証拠は片言隻語も残していない。奈良本は一人相撲をとっている。

自然は飛躍しないと進化論者はかつて述べた。一個人の認識もまた飛躍しない。松陰における世界の中における日本認識も飛躍しない。

研究も飛躍しない。松陰は萩において日本を衝く西洋を初めて知り、「食を忘れ、辺備を講究」[6]したが、「賊衝」において受けた西洋からの衝撃は萩で受けた衝撃よりは具体的で生生しいものである。本稿は平戸・長崎において松陰が自分の目で確かめた西洋の衝撃を探る作業をする。衝撃に対する反応をほとんど示さないのが松陰であるが、行間から汲みとれるものだけを汲みとる。

二　遊学以前の松陰の国際認識

松陰は十九世紀中頃の人である。したがって十八世紀の中頃から始まったロシアがカムチャツカから千島列島づたいに南下し、日本に迫った「北方の脅威」は実感していない。元文四（一七三九）年には三隻のロシア船が奥州牡鹿沖に現われた。明和八（一七七一）年には土佐沖に一艘のロシア艦が漂着した。安永七（一七七八）年には蝦夷地の厚岸に来航したロシア船は通商を求めた。寛政四（一七九二）年九月には女帝エカテリナ二世の公式使節であるアダム・ラックスマンが日本人漂流民大黒屋光太夫らの送還もかね、日本との通商を正式任務として来航した。大原左金吾は北辺武備の具体的論策として『北地危言』を寛政九（一七九七）年に著作した。その中で大原は「外寇は天下のあたにして一国限の寇にあらず」と論断した。封建的割拠主義の枠を越えて、挙国的

関心のもとにナショナルな次元において捉えた論稿であった。[7]

松陰がロシアの接近を「猖狂奸雄悪むべく畏るべき」と受けとったのは林子平の『海国兵談』を読んだ弘化三（一八四六）年である。[8]松陰は前年あたりから対外関係に強い関心を抱いていた。その頃、ロシアは日本から遠のいたが、南方からイギリスが迫る「南方からの脅威」の世紀に転じていた。松陰はこの世紀のなか頃に九州へ遊学した。

イギリスの脅威は文化五（一八〇八）年のフェートン号事件に始まる。オランダの国旗を掲げた異様な船が長崎港外に現われた。検使船が接近すると同乗していた二人のオランダ人が異様船員に拉致された。異様船に掲げられていたオランダの国旗がおろされ、かわってイギリスの軍艦旗が掲げられた。イギリスの新鋭のフリゲート艦フェートン号であった。イギリス艦のいうがままに薪水、食料を供給せざるを得なかったことの責任を感じた長崎奉行松平康英はイギリス艦退去後自決した。文政六（一八二三）年から翌年にかけて常陸・陸奥付近の沖合にイギリスの捕鯨船六、七隻が来港した。文政七（一八二四）年五月には常陸は多賀郡大津浜沖にイギリス捕鯨船二隻が来航し、生糧品を求めて上陸した。文政七（一八二四）年八月、薩摩の土噶喇島（宝島）に接近したイギリスの捕鯨船から乗員が上陸し、薩摩藩士と撃ち合いになった。頻繁に日本近海に来航し、日本の法を犯して上陸するイギリス船を念頭に幕府の天文方にして蘭学者、鎖国論者であった高橋景保は文政七（一八二四）年に、日本の海岸から十里以内に接近した外国船は「是非を論ぜず打払うべし」とする意見書を幕府に提出した。高橋の建白は文政八（一八二五）年二月の「無二念打払令」となって発布された。[9]同年夏、高橋はオランダ語通詞吉雄忠次郎に命じ、『暗厄利亜人性情志』を翻訳させた。[10]本書はイギリス人論である。松陰は本翻訳書を平戸で読んだ。本書が日本において出版されてから四半世紀後のことである。

十九世紀の日本人にとりイギリスを知ることは世界を知ることであった。競い合って日本に迫る西洋諸国、と

りわけイギリスを知ることは世界の中の日本を認識することであった。松陰がイギリス、西洋を初めて知ったのは平戸へ至る五年前の弘化二（一八四五）年、松陰十六歳の時である。動機は、長沼流兵法師範にして藩の海寇手当方であった山田亦介に従学することになり、初めて対座した時の亦介の言説からである。

「近時欧夷日に盛にして、東洋を侵蝕す。印度先づ其の毒を蒙り、而して満清継いで其の辱を受く。餘焔未だ熄まず、琉球に朶頤し突いて崎嶇に来る」[11]

この教訓を受けてから足かけ十六年を経過し、二十九歳の松陰がしたためたものである。斬首される一年三カ月前に、藩命により幽室にあった時の記述である。この文言からわかることは松陰が国際関係問題へ開眼した瞬間から「欧夷」は「毒」を有し、触れるものを「辱」めるだけではなく長崎に迫ってきていると認識していたということである。西夷への恐怖・嫌悪感が松陰の対外認識の出発点であった。

亦介はさらにつづけた。西夷がとめどもなく進攻してくるのは「傑物」がいるからである、傑物のあるところ、其の国必ず強い、国強ければ敵はない、汝は年富み、才足る、激昂以て勲名万国に輝く人物であれ、と教導した。松陰は、北条時宗、豊臣秀吉にはとうてい及ばないが「義律、伯麥、馬里遜」程度の小材ならば凌駕せずんばやまず、と期するところがあった。[12]

東洋を侵略し、日本に迫る「欧夷」に対抗し、日本を防衛するためには、阿片戦争において清国へ遠征してきたイギリス艦隊司令の義律（エリオット）及び伯麥（ブレマ）以上の英傑に自分がなることだと考えた。[13]翌年、つまり弘化三（一八四六）年には家学教授山田宇右衛門から世界の情勢を懇懇と説かれた。宇右衛門は「尤も海賊を以て深憂とす。余是に於て憤を発して食を忘れ、辺備を講究」[14]した。西洋をもって「西夷」と規定した亦介の

定義は宇右衛門により「海賊」の言葉をもって補強された。「南方からの脅威」の世紀の中の松陰は、「西夷」「海賊」の視点から西洋を見たが、同じ西洋の中から多数の長所を発見し、もって日本の手本にすべしと唱えた高島秋帆があり、高野長英があり、渡辺崋山があった。右に岐れ、左に折れる由来はここでは問わないが、人間はいったん視角を定めると、以後その視角に入り易い事柄情報が入力され易いものである。

松陰が一般人には入手できない極秘の外船渡来の風聞書や長崎奉行からの通信等を筆写し『外夷小記』[15]をまとめたのは弘化三（一八四六）年である。

第一記は、天保十二（一八四一）年六月、清国商人がもたらした阿片戦争に関する風説書である。いわゆる唐風説書である。寧波府定海における戦で清朝軍はイギリスの王女をつかまえたために、イギリスはひたすら和睦を乞い、その結果、清朝側は王女及び捕虜二十余人を釈放し、定海県では和解が成立した。その後、広東省を支配していたイギリス軍に清朝から差遣された琦善がイギリスと阿片商売をしたいと上奏したので、天子の逆鱗に触れ罷免された。天子自らが兵を率いて広東へ出発しようとしたが、天子の弟が出発した。その後、広東の戦況の帰趨は不明である。以上が第一記であるがイギリスの王女は戦争に参加していない。したがって王女がとらえられることはない。定海では清朝軍が勝利したような文面になっているが清朝側こそ無条件降伏に近かった。広東においても清朝側は蟷螂の斧に近い無惨な敗け戦であった。唐風説書であるため清国の惨敗という事実を伝えていない。

第二記は酒井安房守が弘化二（一八四五）年四月の幕府への上提文である。同年三月二十六日にアメリカの捕鯨船が日本の難破漁船の乗組員を浦賀に届けにきたこと及び下総、上総の沖合で数日にわたり異船の影雲のごとく見えては消え、消えては現われた、という情報である。

第三、第四記は共に弘化三（一八四六）年五月にイギリス、フランスの船が琉球へ渡来したことを告げる薩摩

藩から長崎奉行へ届けられた情報である。

第五記は長崎に留学中の長州藩蘭学医青木研蔵より弘化三（一八四六）年六月に長州藩庁に届けられたもので、長崎港より五十里程沖に平常の船より余程大きい、七百五十人乗りくらいの大型の異船三艘が現われたという風聞を伝えたものである。

松陰は亦介、宇右衛門から日本に迫る危機的状況を教えられていたので抽象的に欧夷の迫ることは感じていたであろうが風説書、上提文等に触れ、あたかも西夷・海賊が眼前に出現したように緊迫感を抱いたとしても不思議はない。とりわけ西夷とはイギリス、フランスあるいはロシアと説かれていたと思われるが、酒井安房守の上提文によりアメリカの捕鯨船が浦賀に来航したことは衝撃でないわけはない。加うるに「平常ノ船ヨリ余程大」の大船は七百五十人乗りではないかとの青木研蔵からの報告書である。七百五十人乗りの大船は捕鯨船ではないし、貿易船でもない。七百五十人乗りが本物だとすると軍隊を運ぶ輸送船である。アジアにおいて、かくも大型船を三艘も運行できる国はイギリスをおいて他にない。イギリスは青木研蔵の報告書より四年も前に南京条約（一八四二年）において清国より香港を割譲し、五港を開港させている。「南からの脅威」感は重くのしかかる。

阿片戦争においてイギリス王女は清朝軍に逮捕されることはなかったし、清国天子の弟の広東出陣もなかったことも嘉永元（一八四八）年には松陰にも判明したであろう。この年、松陰はイギリス軍の強大さと清国の脆弱は予想外であったことを和蘭風説書で知った。イギリス軍は攻めれば必ず陥し船は必ず砕き、陣は必ず潰滅させたこと[16]、その結果、清国は「瓦解土崩」し、「金を出して和を請いて後に止む[17]」ありさまであったのである。清国が振わなかった理由につき松陰は、綱紀廃弛し、賢材用いられず、操習熟さざるところにある[18]、とした。松陰は阿片戦争終結後二年余を経過しても武器の優劣が、勝敗を決定したことを明確に理解していなかった。高島秋帆は阿片戦争開始後、届いた和蘭風説書の情報を知った瞬間、砲術の威力において清国はイギリスに数百年も遅

れていると上書していた。

松陰は九州へ向う一年半程前の嘉永二（一八四九）年三月の藩府への上書において、世界の中の日本観を以下のように披瀝している。すなわち、イギリスは印度を取り、オーストラリア、スマトラから清国に進出し、フランス、イギリスは琉球、朝鮮に上陸し無法を行っている。ロシアはシベリアを開きカムチャツカに至り、奥蝦夷に迫り、「我が神州を中にして異賊共取囲み候形に相成候」[19]とある。松陰はここでイギリス、フランス、ロシアを挙げたが、「アメリカノ捕鯨船」が相州浦賀に弘化三（一八四六）年に来航したことを知っていた。かような状況の中にある日本が「異賊に備うる」方策は文政八（一八二五）年の無二念打払（一八四六）の一点以外になし、と主張した。

「異賊打払は国体の立つ所にして、志士仁人の深く冀望する所なれば、若し時ありて此の命降る時は、心力竭して事に従わずんばあるべからず」[20]

嘉永二（一八四九）年十月の松陰の対外政策は徹底した無二念打払論者であった。攘夷論者であった。

次に松陰は、取り囲む西洋の武器とこれを攘ち払うとする日本の武器をいかに考えていたかにつき検討したい。松陰は弘化三（一八四六）年五月、「異賊防禦の策」を論じた。日本の西方において異賊の接近、来航が活潑であるが、防禦のためには四点を注意すべきである。一、人才能く辨ずること、二、器械能く利なること、三、操練、四、戦守の術、であるとした。四策中の第二として兵器は精利であるべきだとした。とりわけ「銃砲の利は重大にして遠きに及ぶに在り」[21]とした。

松陰はまず銃砲の精利であるか否かの基準は、弾丸が遠くまで及ぶか否かにあるという点から出発した。飛距

離を問題にしたことが第一点である。しかるに二年後に藩外寇御手当方へ提出した「水陸戦略」においては、大砲は正確に目標を撃つことができるか否かが問題であるとする。[22] 飛距離の長短から命中度の高低へと論点がずれる。「我が国の砲術の精確なる事遠く西洋夷に勝る」[23]と胸をはる。さらに松陰は右提出書において、「且つ又」とつづける。我国人は「賊艦の鉅大堅実なるを恐れ候えども、砲家の説に鉅大は鉅大なる程吾が的になり易く大いに好む所」と弁じる。論点はさらにずれてきている。松陰は和洋双方の砲術を実演したことはなかったし、実演を見学したこともなかった。完全武装した賊の鉅艦を見たこともなかった。彼我双方の兵器の精利に関するデータも見たこともなかった。兵器に関しては、日本の利点と松陰が考える点のみを拾いあげ、点を面に拡大し、西洋に勝ると思い込んでいた。

松陰は、第二に賊の大艦に対しては、我が国は巧みな戦術があるから恐るるに足りないとした。海戦は迅速便利を要とするが、大艦は遅渋であり、不便である。これに対し我が国は漁夫の小舟を用い、一艘に四、五人を乗り込ませ、二、三十艘を押出し、「聚散分合」して賊艦に接近し、攀登り、刀剣をもって切り込む術でいくべきだとした。日本の伝統的海戦策である。肉弾戦である。

第三に、西洋の巨砲大艦に対し、我が国には朝野君臣一致の義勇軍があるから勝たざるはなし、とした。すなわち、西洋の戦争の目的は「利」の追求である。そこには義もなく勇もない。「艦と砲とは器械」である。器械に頼ることは僥倖に頼ることである。これに対し我が国は死を覚悟の上の義勇軍をもって僥倖をたよる賊と戦うのである。巨砲大艦といえども死を必せる義勇軍は「勝たざるはなし」である。[24] 必死の覚悟が定まれば「弱転じて強となるべく、柔変じ剛となすこと」[25]ができる。肝腎なことは「朝野君臣共に一致して必死の働きをなさば（中略）暎夷なんぞ恐るるに足らん」[26]。清国がイギリスに破れたのは、君臣が一致して必死の働きをしなかったからである、と萩を出発する五日前の御前講義で松陰の述べたところである。兵器の精利は消えて、肉弾戦から決死

隊精神を説いた。

長崎・平戸に留学する前の松陰は、

一、西洋は、東洋を侵蝕し、長崎にまで来航した「海賊」である。
二、日本は異賊に包囲されている。
三、日本を包囲して迫る西洋に対しては異賊打払令をもって対抗することこそ「国体」に沿う所以である。
四、西洋の大艦巨砲に対し、日本は義勇軍をもって戦うべし。

と主張した。遊学した松陰は以上の対外認識を「反省」し、「変った」かどうか検討する。

三　衝撃と反応

松陰は九州遊歴中に『西遊日記』を書きつづけた。会った人物はわかるが話し合った内容はほとんど記されていない。読んだ書名はわかり、抜書が頻繁にあるが、松陰自身の感想文は稀にしか記されていない。

国際社会問題に関する書は主として平戸で読んだ。平戸へ至り一週間後に『阿芙蓉彙聞』[27]第一巻を借りた。巻頭の張甄関の『澳門図説』を読み、抜書をする。「嘉靖十四年、番船夷人言、風潮湿貨物、請入澳晒凉。許之、令輸課二萬両。澳有夷自是始」とだけ移写する[28]。この二行の移写の意味につき、松陰は全く附加しない。航海中の潮風で貨物に湿気がしみ込んでしまったので、しばらく浜地で日乾しをさせてほしいと乞い、礼として二萬両を渡した、澳門に夷人が居住するようになったのはこの時以後のことである、という文言が松陰は要注意だ、と

思ったのであろう。夷人は「黠虜覬覦」する狡猾人と見做していた。夷人に対する既成観念に合致した文言であるので移写したのである。したがって夷人たちの互市（通商貿易）は一時的借地を得るところから始まるが、いったん許可すれば、さらに他処にも互市の場所を求めるようになる、そうならぬようにするためには「防微銷萌」に気をつけることであるとの他の文献からの記事を移写する。[29]

『阿芙蓉彙聞』全七巻を読了した松陰は第六巻中の『平暎条説』へ戻り、一部を抄録する。そこにはイギリスは中華を去ること七万里のヨーロッパの西北に在るが、「其人黠而悍、常与紅毛、荷蘭、仏郎機構兵、侵奪其地、寖以強大」[30]とある。松陰にはイギリスは「黠而悍」であり、オランダ、フランスを侵奪した強大国である、との箇所を忘却すべからずと記したのである。松陰は抄録をつづける。イギリスは広東省の島新阜、東南アジアのシンガポール、マラッカ等にも進出している。シンガポールでは堂々たる建物、住宅を建築し、その土地の者にしてシンガポールに渉居する者一万人を越えている。堅固で大きい学校を建て、清国の優秀なる青年を教育している。教師の中には漢文を教え、漢語を教える者もある。経史子集もことごとく備えている。イギリスは教育を通じて清国の虚実をうかがおうとしている。漢奸はイギリスと結託しているし、洋商は漢奸と兄弟のごとく親しんでいる。イギリス人は清国人の一挙手一投足はすべてよく知りつくしているが、清国人はイギリス人の手の内はわかっていない。この点がもっともはっきりしている点であるとした。以上のごとく松陰が『平暎条説』を三か所から蜿蜒と抄録する所以は、イギリスは阿片戦争前に東南アジアに進出し、そこにおいて現地人、清国人を手なずけ、清国を徹底して研究し、虚を突く機会を狙っていたことに注目したことを示すものである。イギリスが日本を狙う場合もこの方法によるとの思惑があっての移写である。単なる物識りになるための抄録ではない。

松陰のイギリス研究はつづく。『近時海国必読書』を読む。本書中の『暗厄利亜人性情志』[31]からイギリス人はフランス人より華美ではなく胆気豪弘であるとの箇所は移写するがそのあとに直結している「我国民ノ情態ヲ能

ク識レル人ハ皆、我親切仁慈ニシテ、傑然タルノ志アルヲ許スヘシ」[32]の文字は移写しない。さらにつづけてイギリス人は交際において阿諛面諂を嫌い、公私の大難に処しては勇敢果断である点は他国の亀鑑である、とする自賛の文字も移写しない。

珍しく、松陰は、この書の読後感を記す。

「其の俗悍兇果決、豪強恣放、色を好み酒に酗い、政令覊すべからず、権貴御すべからず、而して学術に務めて、仏教（羅馬教法）を遠ざけ、工巧緻にして術精研なること、及び払人と相悪むの情を見るに足る。唯だ其の俗を称して朴実と曰い、其の政を寛容と曰うに至っては、未だ其の説を得ざるなり。矩方識す。[33]」

松陰はイギリス人の好学心、技術力、研究熱心は認めるが、他面において悍兇果決、豪強恣放、好色、酒酗、政令軽視、権威不信であるともいう。ウェイトは後者にある。

松陰がイギリス人を恣放、秩序紊乱者、権貴への反抗者と考えたのは『暗厄利亜人性情志』中の次のような箇書を理解できなかったからである。

最近まで二百年のイギリスの政治社会の変革ほど大なるものはない。かつて国王の虐政ははかりしれなかったことはミルトンの政治学書にある通りである。[34]それが現在では「寛裕ニ転」じている。[35]昔のイギリスは政治は苛烈、宗教は絶対であったが、イギリス人は「恣ニ是ヲ思イ、是ヲ言イ、是ヲ施シ、行ウ事」により改造した。[36]他国人は政治、宗教に束縛されていて、イギリス人のようにほしいままに考え、発言し、行動し、自分たちに有利な法律を制定しようとしない。それゆえにモンテスキュウはイギリス人は「書ニ於テハ、各自家ノ見議ヲ述テ、他人ノ説ニ由ラサルコト明ナリ。執政ノ勢アル人ヲ、尊敬シ媚ヒ阿ル所、総テ他邦ノ人ト異ル」かようにしてイ

ギリス人は「王ヲ貴フノ心少ク」「其国累代ノ権貴」を重んずること軽く、階級の高い者も「庶人ノ不遜ヲ制スルニ足ラヌ」、その理由は「彼モ己モ同位ナルカ如ク思ウニ至」ったからである[37]、とも論じていた。松陰が読んだ『暗厄利亜人性情志』には、イギリス人が自主独立の自由人であり、平等主義者であることが述べられていたが松陰はそれらの点を汲みとることができなかった。

松陰はとりわけイギリス人に偏見を抱いていたわけではない。彼のイギリス観は、当時の日本知識人の平均的な考え方であった。『暗厄利亜人性情志』には、オランダ語学者にして西洋に関する知識の第一人者でもあった高橋景保が序文を寄せている。その中にはイギリスの政治社会は「放恣無制」であるとして以下のように書き立てる。すなわち「中古改革」以後、政治法律は「一国ノ議リ立ル所」であって、王もこれに背くことはできない。「政法ハ国ノ政法ナリ。王ノ政治」ではない、したがって「執政権貴」も国民を統御できず、国民は権貴の威を挫くことをよしとしている、ここには「君臣上下ノ別」は「無カ如シ」である。これをもって「寛裕ノ政」というが、「放恣無制」であるときめつける[38]。松陰と五十歩百歩である。

『暗厄利亜人性情志』にはイギリスの選挙制度、立憲政治についても多少紹介されているが松陰はこれらの政治システムについては触れない。気づいていないのかもしれない。自由、平等の考え方が理解できない松陰には民主主義的政治制度に気づかなかったとしても不思議はない。松陰は『暗厄利亜人性情志』の読後感の末尾に、イギリスの政治が寛容だと言われているが、その点がわからないと結んだ。高橋景保もまた松陰と違わない見解であった。両者共、イギリス人の実生活の中で発展してきた自由・民主主義の発展史及び自由平等を保障する選挙制度、議会政治を理解できないのであるから政治的寛容を摑めないのはやむを得ない。命令、服従の縦社会において禄を食む松陰には王を尊ぶ心少く、権貴を重んずること軽い平等社会に視野を広げることは至難である。

異国人の日常生活の実態の理解なしには、外に現われる躍動もまた理解できないかもしれない。松陰は平戸で

渡辺崋山の『慎機論』を読み、長崎で高野長英の『戊戌夢物語』を読んだ。読みはしたが一行の移写もなければ、読後感もない。書名を記すだけである。無反応な理由を考えたい。

渡辺、高野は小関三英と共に蛮社の獄の犠牲者である。渡辺と小関は自殺し、高野は切腹した。両書共、モリソン号事件に関係する。天保八（一八三七）年にモリソン号が日本人漂流民を日本へ送還するために来航した。日本側は異国船打払令により追い返した。再度、同号は来航するというので為政者も知識人も再度砲撃を浴びせて退散させるか否かの選択をめぐり国運を賭ける問題として議論があった。モリソン号はアメリカ船であったが、来航した時も、再来航が伝えられた時もイギリス船と考えられていた。モリソン号を指揮するのはイギリスの傑物モリソンであると伝えられていた。モリソン号再来の場合を考え、対応を論じたものが、『慎機論』であり、『戊戌夢物語』である。両書ともモリソン号再来の場合、いたずらに砲撃すべきではないという点で問答無用の打払令と異る。両書の内容を紹介する。

『慎機論』は『近時海国必読書』に収められていた。四千字程のものである。渡辺の西洋人論である。整理して箇条書きにする。[39]

一、西洋人は沈着にして忍耐強い。各人は個性に従って教・政・技術の中から進路を決める。天地自然や世界情勢を審にしていることは唐山も及ばない。すなわち西洋人は優秀であるとした。唐山も及ばないとは、日本もまた及ばないということでもある。

二、西洋諸国は世界中に進出し、アジアにおいては我国、唐山、ペルシアしか独立国はないが、この三国の中で西洋と通商していない国は、我国だけである。かくて「我邦は途上の遺肉の如し、餓虎渇狼」に狙われる。日本の鎖国は地球世界に害がある。ロシア、イギリスは日本の打払令を日本侵略の手がかりにするであろう。

三、日本は海に囲まれている。このことは世界中の国ぐにと国境を接していることである。我国の防衛に至っ

てはまことに不備である。これに対し西洋は世界を征服する艦船を有し、大砲を擁している。

四、危機克服の方策を大臣に上達しようとしても、貴族、賄賂で出世した者や事なかれ主義者が取り巻いていていかんともし難い。こんな状態では手をこまねいて外敵を待つより仕方がないのかもしれない。

『慎機論』は西洋人の長所を多く挙げる上に、日本の鎖国政策は西洋の侵略を招く呼び水となり、西洋は大艦巨砲を備えている国とするのであるから為政者、松陰は納得できない。その上に下意を上達できない我が国の政治構造を批判する『慎機論』は幕府の逆鱗に触れて渡辺逮捕の主要点となる。幕政批判は、松陰から見ても天下を乱す議論と受けとられても仕方がない。松陰は『慎機論』を読みながら移写も読後感もないのは、無視を越えて嫌悪感の表われである。

高野の『戊戌夢物語』は六千字に満たないイギリス人論である。整理し箇条書にする。

一、イギリス人は、「敏捷にして、諸事勉強して倦怠せず、好んで文学に勤め、工技を研究し、武術を錬磨し、民を富し、国を強くすることを先務」としている。

二、海外の領土は北アメリカ、西印度、アフリカ、オーストラリア等々である。

三、広大な領土を保持するために、一艘につき大砲四、五十門を備えた軍船二万六千艘、乗組員百万人を超えている。五大州中比類なき領土と軍事力を有しているため、「諸国の者ども之を羨み、怖れ」ている。

四、西洋人は殊の外人命を尊重している。もしも日本が漂流民を送還して来た者に対し打払いをしたならば、「日本は民を憐まざる不仁の国」として憤り、暴国である、不義の国であると宣伝するから日本は孤立し、その結果いかなる大難が生ずるかわからない。「国内衰弱」し、「国家の御武威を損ぜられ候」と述べていた。

松陰は『戊戌夢物語』からも一行の移写もなければ読後感の一言半句もない。『慎機論』への対応と同じである。両書は、西洋人、イギリス人への批判がなく、西洋人、イギリス人は優秀であり、富裕にして強大であるから、

これらの国と事を構えることは国威を失墜することになりかねないとした。このような主張は、西洋、イギリスをもって西夷あるいは英夷と呼び、海賊と称し、悍兇、恣放と唱えてきた松陰と波長が合わない。これに対し『暗厄利亜人性情志』を読み、珍しく読後感を記したのは、松陰が国際政治に関心を抱いた時から植えつけられていた西洋乃至はイギリスへの先入観となっている悍兇、恣放、好色、酒酗等々と合致した点があったからである。『暗厄利亜人性情志』中にもイギリス人の善き点も多く記述されているが、松陰はこの点は日記に書かない。

松陰が渡辺、高野の著作に反応なき所以をさらに知るためには羽倉周九（簡堂）が嘉永二（一八四九）年に著わした『海防私策』への鮮明な反応と比較するとよくわかる。羽倉の著述は『近時海国必読書』の中に『慎機論』他と共に収められていた。松陰は『海防私策』から以下のように移写する。要約である。

カピタン（長崎のオランダ館の館長）に以下のように告諭すべきである。すなわち、最近、洋夷がしばしば日本近海に来航し、禁を破って上陸する者がいる、今より以後、もしも洋夷が上陸したならば「不問禍心有無」「随見誅戮」することにした、オランダ人は洋夷と識別しがたいのでオランダ人の方で注意していただきたい、そうでなくては蘭と艾とはまぎらわしいから一緒にして焚いてしまいかねない、そうなればまことに気の毒であるから、どうかカピタンからオランダ人に注意してほしい。[40] との文字を移写する。禍心の有無を問わず、見つけ次第誅戮する、の文字は厳しい。「恰蘭艾同焚」もまたきつい文字である。

松陰の移写はさらにつづく。来航船が薪水をほしいというのであればこれを与えるが、もしも上陸したならば「随見銃殺。碇泊三艘以上、一郡出兵、五艘以上八一州出兵、十艘以上、隣州出兵援之」という箇所も移写した。[41] 比較的長文の移写である。松陰の対夷策と波長が合ったことを意味しないであろうか。渡辺、高野の著述に反応を示さなかったのは、共鳴できなかったからである。松陰はイギリスなり西洋に対して初めから身構えるべく教訓を受けて出発した。渡辺、高野は自ら西洋の中に飛び込み、かれらの中にあって日本に無いものを汲みとろう

とする姿勢で臨んだ。

ここで渡辺、高野と同様に西洋の懐の中へ飛び込み、西洋から学習しようとした高島秋帆と松陰とを対比する。松陰は秋帆と会っていない。秋帆の書き物も読んでいない。しかし松陰は秋帆の子にして高島流砲術師範の高島浅五郎と七回会っている。七回とも松陰の方から浅五郎を訪問している。いっぺんの挨拶だけとは考えられない。

松陰が生まれた天保元年には三十三歳の秋帆は西洋の砲術の研究を始めていた。松陰は十一歳の時、藩主毛利敬親に『武教全書』を講義した俊才であった。秋帆はこの年アヘン戦争初期の段階で清国は忽ち大敗し、イギリスは一兵の戦死者もなかったのは全くイギリスの武器の精鋭によるものであるとの意見書を長崎奉行に提出していた。奉行は、これを幕府に提出した。「天保上書」ともいわれ、「西洋砲術意見書」といわれているもので兵制改革の原動力となった。[42] この意見書においていま一言つけ加えるならば、秋帆は、イギリスは国が小さく、この戦争の名義も不正であるのにイギリスの大勝は、蘭人がかねて清国の砲術は児戯に等しいと嘲笑していたことが思い当る、翻って我国の火術であるが、すでに西洋では数百年前に廃棄した陳腐なものであるから国家の武備としては役立たない、としたためてあった。松陰が長州藩の寇を論じていた時、秋帆は天下の外寇を論じていた。秋帆が天保十二（一八四一）年に幕府の命により徳丸原（現在東京都板橋区高島平）において四門の大砲の実射をした時、浅五郎は一隊の長を務めた。松陰は浅五郎から父秋帆の西洋砲との出会い、西洋砲の鋳造、西洋と日本との砲の威力に関する比較、巨砲を生み出した西洋人のものの見方、考え方を学ばなかったであろうか。松陰は浅五郎との七回にもわたる面談において語り合った内容、秋帆・浅五郎の西洋砲術研究と実演から学ぶところがあったか否か、なんの証拠も残していない。

そもそも松陰が長崎・平戸へ遊学した目的は「虜の情状」を審に知るためであった。そのためには世界に覇を

広げている西洋の武器の研究がなくてはならぬ。

松陰は平戸へ着き、葉山佐内と初対面の折に葉山の著『辺備摘案』を借用した。葉山は清国、朝鮮から日本への漂流者からの聞きとり書や海外からの最新の書から西洋の膨張を知り、それへの海防書として本書を著わした。そこには、優秀な西洋の造船火器のことが叙述されていた。松陰は本書により平戸留学以前に持っていた和式兵学に対する絶対的自信を簡単に崩してしまった、松陰は葉山の説く西洋兵器の優秀性説に屈服せざるを得なかった、と先学は説いている。[43]

松陰は『辺備摘案』を全頁移写し、欄外に感想、疑問点を書きつけている。[44] ポイントを要約する。

一、西夷の巨砲はよく訓練されていて、正確をきわめるとか、大砲は地上のものを焼き尽し、構造物を大破するというが、その通りであるか、どうか。

二、我が国の小舟の有利な点は一、二ではない。港や隠れ易い場所に置けば、西洋の大艦は得意の作戦を展開できない。

三、大艦巨砲はいかに善美を尽しても皆形而下のものである。末である。彼も人であり、我も人である。学んで造ればよく、練習して精を出す形而上を論ずることこそ、本である。最近、ある論者が艦堅砲巨が百戦百勝を導くと述べていたが、これは本末転倒ではないか。

松陰はこれらの諸点を葉山に聞き糺したかどうか不明であるが、以下のことはわかる。

第一点は、松陰は留学以前の和式兵学への自信を簡単に崩していないことである。

第二に、松陰は西洋の大船堅艦に対し従来通りの小舟主義である。松陰は平戸に至る三日前に、長崎港に停泊しているオランダの貿易船に案内されている。この船の大きさは不明であるが、そのころ入航していたオランダ

の貿易船はおよそ船長四十七メートル、船幅は十二メートルであった。[45] これは貿易船であるが、松陰は大船堅艦に対し、小舟で対抗するというのである。当時、幕府は五百石（五十トン）以上の造船を許可していなかった。例外として紀伊国屋文左衛門の千石船（百トン）があった。松陰の小舟は、四、五人乗りの漁舟であるから五百石の五分の一、あるいは十分の一である。アヘン戦争でイギリスの遠征隊に対し、清国は五、六十トンの船で対抗したが一蹴された。千トン、千五百トンの軍艦に対し、漁舟で聚散分合の挑戦をしても巨艦の起す波で転覆してしまうことが松陰にはわからないようである。

松陰は第三に、大艦巨砲は形而下の問題である、練習にはげみ精を出す形而上の問題を考えるべきだ、と述べた。形而上の問題を論ずると、義勇軍問題、決死隊問題に至る可能性があるが、松陰はそこまで言及しない。しかしながら松陰は『辺備摘案』により和式兵学への自信を崩していない。

松陰は平戸留学の末期に『百幾撒私（ペキサンス）』[46]を借り、読んだ。憑かれたように西洋の新式大砲の外型・威力等を書きつづける。諸国の軍艦が備えている大砲数は公称されている数より多いようである。例えばオランダの七十四門を備えていると称している軍艦は三十六ポンドカノン砲二十八門、二十四ポンドカノン砲三十門、十八ポンドカノン砲四門、三十ポンドカルロンナーデ砲十六門、合計七十八門である。積む大砲数は年々多く、砲身はより長く、火薬はいよいよ大量に使用する。射程はますます遠方にまで飛ぶようになる。軍艦を標的にして八十ポンドのボンベカノン砲を試射すると、弾丸の穿の内径は八センチ、其舷材の厚さは二十八センチ、四方より支柱する二柱はこれがために抜除される、と刻明に記す。以上は書物からのメモであるから問題はない。つづけて松陰は、ここまで読み、メモしてきた上で、次のごとき感想を綴る。

「盆辨弾は（中略）一発尚お敵兵をして危険に至らしむべし。大数の小船に此の炮を備えて、小数のリニー船と戦わんに、

必ず大勝を得べきなり。故に海軍の船は甚だ大ならざるものを造るべし。又此の如く小なれば、敵砲を避くるの一助となるなり。船小なるときは、之れを造る速かにして進退し易し、戦に於て大艦より勇にして捷便なり。其の船小にして惜しむに足らざればなり。其の他浜汀に艤するを得、敗軍の時隠匿し易し」(47)

松陰は大艦に対する小船による聚散分合至上主義者である。旧来の和式海戦兵学は崩れていないどころか微動だもしていない。西洋式武器の威力を知っても屈服しなかった。

ボンベカノン砲の威力だけはわかった。多数の漁船にボンベカノン砲を積み戦えば必ず大勝するというが、搭載する砲は何ポンドのボンベカノン砲であるか明記しない。八十ポンドボンベカノン砲とは、火薬だけの重量が八十ポンドである。約三十六キロである。三十六キロの火薬をつめた砲丸は鉄銅の外殻を含めると大人一人前の重さになるのではないか。この砲弾を発射する砲車はとうてい小船に載せられる代物ではない。陸上の備えつける要塞砲ではないか。先述のオランダ艦に積まれていた最小の砲でも十八ポンドカノン砲であった。火薬だけでも十八ポンドである。八キロである。砲身等を加味すると漁船に搭載して固定できるものではない。しかも砲弾は一発だけ積めばよいというものではない。多数の砲弾を積む必要がある。そうなれば敵の砲弾の命中を受けても引火爆発を防止する強固な弾薬庫を備える必要がある。小船では弾薬庫を設ける余地はない。

船が小であれば造船がスピーディであるということはわかるにしても、敵弾を避け易く、行動が捷敏であり、失っても惜しくはないし、浜汀に隠匿し易い等の文言には、海戦における主導権発揮の発想がない。避け、逃げ廻り、沈没し、隠匿することを前提にした考え方である。

松陰の感想はなおもつづく。「盆辨弾、皆的船を貫穿するを以て、之れを防拒するには重大なる船鎧（即ち鉄を被らしめ鉄船を造る）を用いざるを得ず。已に此くの如くなれば、水軍に於ては、皆剣を執りて決戦するに至

るべし。払郎西は兵士に富みて水夫に乏し、故に又大いに利あり」[48]とある。船鎧は厚くなる結果、射ち合い、命中しても沈没しないから大艦同士が体当たりする、剣を持った兵士が突入し、艦上の合戦になるというのである。松陰には一、〇〇〇メートル、あるいは二、〇〇〇メートルの距離をおいて大艦に積んだ大砲を撃ち合う海戦がイメージされていない。あたかも東西の両軍が法螺貝を吹き鳴らし敵味方が入り乱れて戦う関ヶ原の合戦のイメージがひそんでいるように思われる。

四　結語

人間は新しい文物・文明に接触すれば、従来から内在しているものの見方、考え方が崩壊し、新しい視野が開くとは限らない。長崎・平戸で西洋の軍事的文明の衝撃を受けながらも松陰の身についた和式兵学は崩壊しなかったし、西洋の兵学に屈服しなかった。西洋文明への開眼はなかった。十六、七歳の頃、先学や文書から西夷への脅威、嫌悪を抱いた松陰は、『暗厄利亜人性情志』の中からイギリスは悍兇、恣放、好色、酒酗であるとのマイナスイメージの感想をさらに強く受けた。『海防私策』からも、日本の禁制をわきまえず上陸した者は、理由の如何を問わず殺戮、銃殺すべしとの文言に引きつけられた。松陰は少年時代から反西洋論者であり、攘夷論者であった。長崎・平戸へ留学しても、この考え方は変わらなかった。

松陰より年齢的に先輩である渡辺崋山、高野長英、高島秋帆・浅五郎らは新しい西洋の風を胸いっぱいに吸いこみ、これを十九世紀の世界に生き残れる心身強化の糧にしようとした。これに対し松陰は新しい風を吸うまいとした。双方の違いは那辺に由来するであろうか。

松陰は武士であり、兵法家であった。武士は藩主と藩に身命を捧げることを建前としている。わが主君は天下

の名君であり、わが藩は天下一品であると信じ切り、他国の君主や他国に眼が眩んでは武士はつとまらない。いわんや外国人の美徳や武器の優秀性は口にすべきではない。松陰は武士の中の武士であった。終生を通じ純粋な武士であった。さらに松陰は幼にして鈴韜の業を継いで以来、百数十年来の山鹿流兵法をもって長州三十六万石の重責を一身に担うべきだと心を決めていた。西洋の武器の優秀性を認めることは先祖伝来の兵法を放棄することになる。できないことである。

他方、渡辺崋山は三河国田原藩の武士の長男であったから武士の家を継がなくてはならなかった。しかし身分低く、貧しく、長病の父をかかえている崋山は何回も武士であることに絶望し、長崎へ出奔する計画まで立てた。粒粒辛苦の末に年寄役末席となり、海防懸に任ぜられた。務め柄、蘭学を研究した。西洋の地理、歴史、風俗、兵学、砲術等多方面を研究し[49]、やがて「蘭学の大施主[50]」といわれるほどになった。少青年期に武士を棄てることも考えたほどに武士にとらわれなかったことが蘭学研究に進み、世界と日本を知ることになった。

高野長英は武士ではない。陸奥国水沢に生まれた高野は江戸に遊学し、さらに長崎に遊学し、シーボルトに学び、蘭学と蘭医術を学んだ。長崎へ赴き、シーボルトの門をくぐることの中に、西洋に憧憬するものがある。修学を終えた長英は江戸で医院を開き、自由な町医者として診療、講義、医療方面の訳述につとめた。蘭学を学ぶことにより、日本の外にある大状況が見えてきた。日本の将来を考えざるを得なくなる。

高島秋帆も士ではない。長崎の町年寄の二男であった。浅五郎も町年寄であった。町年寄とは日本人とオランダ人との間の交渉の仲介者である。オランダ語は仕事上必須であった。銃砲を外国より購入し、やがて自ら鋳造するようになった。

渡辺が武士をやめようと思ったこと、高野、高島父子は武士でなかったことは彼等を自由にした。自由な発想、自由な選択、自由な行動を可能にした。蘭学への関心、西洋技術の摂取は自由であればこそかなえられる。日本

と西洋とを相対的に比較し得る感覚を持つことができた。他方、松陰は武士であり、兵法家である。藩主、藩、伝統的兵法に拘束される。松陰は後年、孔子孟子は生国において志を達成できないことから他国の君主に仕えたことを批判するようになる。[51] 生国の君主と生国に釘づけである松陰は、海の向うのはるか遠方にある西洋を客観的に研究する余裕がない。武士は武家政治の社会においては特権階級であるが、特権が仇となり、自由なる発想・選択・行動を妨げる。松陰の世界認識への鈍さは武士であったからである。外から日本に迫る西洋の文明の実力を捉えることができなかった。長崎・平戸に遊学し、世界という大状況の刺激を浴びながら世界と日本のバランスを考えることができなかった。松陰は武士であり、あまりにも武士であることに純粋であったがゆえに、変身し、蘇生し得なかった。

（1）吉田松陰の「名は矩方、字は子義または義卿、通称は初め虎之助、後に大次郎、松次郎といい、終に寅次郎と改めた。松陰あるいは二十一回猛士はその号」である。稀にいくつかの別号があり、変名がある（玖村敏雄『吉田松陰』岩波書店　昭和十一年十二月十五日、一頁）。本稿では一貫して松陰と称す。

（2）本稿ではすべて数え年である。

（3）嘉永二（一八四九）年から同三年にかけて藩府に提出した「平戸遊学関係文書」八通による（山口県教育委員会編『吉田松陰全集　第十巻』大和書房、昭和四十九年四月三十日、二九―三五頁）。本稿では特に記載しない限り大和書房版『吉田松陰全集』を用いる。

（4）「葉山鎧軒に与うる書」（前掲『吉田松陰全集　第一巻』昭和四十九年十二月二十日　一〇〇―一〇一頁）。

（5）「歴史における松陰の役割」（前掲『吉田松陰全集　第十巻』附録の「月報」一頁）。なお松陰が長崎・平戸へ遊学したのは数え年で二十一歳、満で二十歳である。また松陰が阿片戦争に関する記録を多読したのは平戸である。奈良本は『吉田松陰』（岩

波新書、一九五一年一月十五日。本稿は一九七五年一月二十日発行の第二十五刷による）において松陰は平戸・長崎で読んだものに「鴉片戦争に関するものの外、如何に時勢を知り、外国の事情を知るための書が含まれていたことであろうか」とし、つづけて嘉永三年十月一日の日記中にある松陰が借りてきた書物中に納められている文献リスト二十三種目の文献名を書き連らねている。しかし奈良本は二十三種目の文献の、いかなるものから時勢と外国の事情をいかに知ったかという作業を全くしていない。さらに奈良本は『日本の思想19　吉田松陰集』を編集し、その巻頭に「解説　松陰の人と思想」を置いた。解説中に松陰は、平戸・長崎で百余冊の書を読んだ、その中には阿片戦争関係の『阿芙蓉彙聞』、『鴉片始末』から高野長英『夢物語』、渡辺崋山『慎機論』等厖大な書を読んだ、高島流砲術を見聞し、オランダ船も確かめた、「これは彼の眼が世界に向って広がったことを意味している。それと同時に、山鹿流軍学の一つにかかわって生きることの疑問もしのびよってきた」（筑摩書房、一九五六年五月二十日　一二―一三頁）と書きながら、ここでもまた世界に向って広がった視野、山鹿流軍学への疑問の証拠をただの一例も挙げていない。奈良本は松陰は「変った」、「反省」した、「動揺」した、視野が「世界に向」った、山鹿流軍学に「疑問」がしのびよった根拠を全然挙げていないが、挙げようがないのである。松陰が「変った」、「反省」した、「動揺」した、「疑問」がしのびよった等々のことは、ただの一箇所も記述していないからである。なんの証拠も挙げることなく、それ故に一字一行の論証も記述せず、奈良本自身の思い込みで絵空事を描くのが奈良本史学である。それはフィクションである。

（6）「講孟餘話　尽心下篇三十五章」（『吉田松陰全集　第三巻』昭和四十九年十二月二十日　四一〇頁）。

（7）犬塚孝明『明治維新対外関係史研究』（吉川弘文館　昭和六十二年七月十日）一六―一七頁。

（8）「海国兵談跋」（前掲『吉田松陰全集　第一巻』）五五頁。

（9）前掲犬塚著三五―三七頁。

（10）吉雄は前年の常陸大津浜事件において現地に赴き、イギリス人と応接している。なお『暗厄利亜人性情志』の原著者は不明である。

（11）「含章齋山田先生に与うる書」（前掲『吉田松陰全集　第四巻』昭和四十九年十二月二十日　三九一頁）。

（12）右同書　三九二頁。

（13）義律・伯麥はエリオット（George Eliot）であり、ブレマ（J.J. Godom Bremer）であるが、馬里遜についてはこれまで「不明」

とされている。仮説であるが天保八（一八三七）年に浦賀に来航したモリソン号に関係しているのではないか、と考える。来航したイギリス船モリソン号は追い払われた。イギリス船ではなく、じつはアメリカ船であったことは後日、わかったが当初はイギリス船と考えられていた。天保九（一八三八）年十月二十七日、江戸の蘭学者たちの集りで、幕府内においてモリソン号は、傑出したモリソンといわれるイギリス人が指揮する船であって、この船は近く再来航するとの噂があることが伝わった。この噂と、再来航した場合、日本側として対応すべき方法を描いた書が高野長英の『戊戌夢物語』であり、渡辺崋山の『慎機論』である。『戊戌夢物語』によると、モリソンは「碩学宏才の者」で「広東交易の総督」でもあり、「南海中の諸軍艦一切支配仕候由に付、少くも水軍二、三万位も撫育仕候」、「此度モリソン罷越候事は、尋常の事とは不被存候」と噂されていた（高野長英『戊戌夢物語』（『渡辺崋山　高野長英　佐久間象山　横井小楠　橋本左内』岩波書店　日本思想体系　55』一九七一年六月二十五日　一六五頁―一六九頁）。

（14）　註6と同じ。

（15）『外夷小記』（岩波書店『吉田松陰全集　第九巻』昭和十年十一月十八日、二四七―二五四頁）。

（16）「粤東義勇檄文の後に書す」（前掲『吉田松陰全集　第一巻』二三〇頁）。

（17）（18）「瓊杵田津話の後に書す」（右同書　二二九頁）。

（19）「水陸戦略」（右同書一四九頁）。

（20）「対策壱通策問」（右同書二五四頁）。

（21）「異賊防禦の策」（右同書六一―六三頁）。

（22）　註19に同じ（右同書一五〇頁）。

（23）　右同、一五五頁。

（24）　前掲「粤東義勇檄文の後に書す」。

（25）「武教全書　守城」（前掲『吉田松陰全集　第一巻』二六頁。

（26）　右同　二九頁。

（27）『阿芙蓉彙聞』は塩谷宕陰が阿片戦争関係の文書を七巻に編集したものである。弘化四年序。平戸に九月十四日に着き、二

十一日に豊島権平から第一巻を借りた。

(28) 『阿芙蓉彙聞』第一巻（『吉田松陰全集　第九巻』四〇頁）。

(29) 『阿芙蓉彙聞』第一巻中の趙翼著『外番借地互市』（右同書、同頁）。

(30) 右同書、四七頁。なお『吉田松陰全集　第九巻』（四七頁）では「仏郎機」となっているが、『吉田松陰』（岩波書店『日本思想体系54』（一九七八年十一月二十二日、四一二頁）では「仏郎机」となっており、校訂者は欄外に「ポルトガル（人）及びイスパニア（人）」と註釈している。

(31) 既述の通り、本書の原著者は不明である。幕府天文方高橋景保が吉雄忠次郎に命じ翻訳させた。

(32) 吉雄宜訳・浦野元周校『暗厄利亜人性情志』（海防史料刊行会『日本海防史料叢書　第三巻』〈昭和七年九月十三日〉一〇〇頁）。

(33) 前掲『吉田松陰全集　第九巻』五一頁。

(34) 前掲『日本海防史料叢書　第三巻』九四頁。

(35) 右同書、九六頁。

(36)(37) 右同書、九七頁。

(38) 高橋景保「暗厄利亜人性情志序」（前掲『日本海防史料叢書　第三巻』九一頁。

(39) 『慎機論』及び『戊戌夢物語』は『日本思想体系55　渡邊崋山　高野長英　佐久間象山　横井小楠　橋本左内』（岩波書店一九七一年六月二十五日）に収められているものに従う。

(40)(41) 前掲『吉田松陰全集　第九巻』五六頁。

(42) 有馬成甫『高島秋帆』（吉川弘文館　平成元年五月一日新装版）一三九―一四三頁。

(43) 栗田尚弥「吉田松陰の『国家』論」（『政治経済史学』第二三七号、一九八六年一月）。

(44) 「辺備摘案」（『吉田松陰全集　第四巻』岩波書店　昭和九年十二月八日　五九二―五九三頁）。

(45) 松陰が長崎へ行った嘉永三（一八五〇）年九月に最も近かった弘化四（一八四七）年に来航したオランダ船は船長弐拾三間五合三杓、幅六間弐合七杓であった（日蘭学会・法政蘭学研究会編『和蘭風説書集成　下巻』〈吉川弘文館　昭和五十四年三

月二十五日　二二六頁）。トン数は不明。

（46）『百幾撒私』はフランスのジョセフ・ペキサンの大砲に関する書である。ナポレオンのモスクワ包囲戦で敗残者となったフランス陸軍士官ペキサンは、イギリスの軍事的覇権を打破するために海軍の砲裂弾砲の開発に進み、一八二二年に、世界で初めての大型炸裂弾砲の試射に成功した。画期的な破壊力を持つ新兵器の解説書が『百幾撒私』である。

（47）（48）前掲『吉田松陰全集　第九巻』七二頁。

（49）佐藤昌介「渡邊崋山と高野長英」（前掲『日本思想体系　55』六二九頁）。

（50）鈴木進「渡邊崋山」（『日本美術絵画　第二十四巻　渡邊崋山』一〇五頁）。

（51）「講孟餘話」（前掲『吉田松陰全集　第三巻』二三頁）。